

氏名(本籍)	まえ かわ とも こ 前 川 智 子 (兵 庫 県)			
学位の種類	博 士 (文 学)			
学位記番号	博 甲 第 5576 号			
学位授与年月日	平成 22 年 12 月 31 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審査研究科	人文社会科学研究科			
学位論文題目	結集の民俗的仕掛け - 茨城県土浦市域における祭礼の伝承過程とその担い手 -			
主査	査	筑波大学教授	博士(文学)	古 家 信 平
副査	査	筑波大学教授	文学博士	小 口 千 明
副査	査	筑波大学教授	博士(文学)	徳 丸 亜 木
副査	査	筑波大学教授	博士(文学)	好 井 裕 明

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は都市で生活し個々人の選択あるいは社会的規制によって生まれる人々の集まりを「結集」とし、結集の基本的な型をムラに求める櫻井徳太郎の議論を批判的に検討する。都市における結集は固定的でなく流動的であり、人々は場を共有することによって人間関係を持つ一方で、場を離れた途端に解消される場合もある。本論文では人々の関係が可視化される祭礼を取り上げ、ムラで抽出した伝承母体論にかかわるとらえかたを提起する。

序論「問題と方法」では、まずムラを対象として論じられてきた伝承母体論を乗り越えるために、都市祭礼の場において町内会と外部の多様な集団との間の交流に着目し、行為の観察を通して統合のあり方と共同性の生成を探る、とする。また、伝承の概念についても人々の間で途切れることなく続いたという固定的なとらえ方を廃し、縦の人間関係によって伝達されるだけでなく、場を共有する人々の判断や価値観、相互の関わりとともにとらえ直す。さまざまな工夫や仕掛けを新たに作り出す伝承主体として個人をとらえ、民俗を形成する人々の行為に着目するため、伝承過程という概念を提起する。

具体的に検討する場として、茨城県土浦市旧市街と新しく行政区画の変更によって出来た町内会における祭礼、これらと対比するために土浦市街から離れたムラにおける祭礼を取り上げる。現地調査は 2007 年 7 月から 2010 年 7 月の間に行われた各祭礼の準備段階からの参与観察およびそれ以外の期間に聞き取り調査を実施した。本論文の資料編としてインタビューを文字化したものを収録した。

第 1 章「町内と祭礼 - 茨城県土浦市八坂神社祇園祭の事例 -」では、江戸時代から続く目抜き通りである中城商店街がある土浦市中央 1 丁目の町内会を中心に毎年 7 月末に 3 日間行われる八坂神社祇園祭を取り上げる。祭礼を担うのは中央 1 丁目町内会、子ども育成会、青年会、老人会で、町内会の外部には八坂神社の氏子区域に当たる 19 の町内から神輿の渡御を担当する十九会(とくのかい)と土浦青年会議所が母体となって結成された神輿の担ぎ手の会である礎会(いしずえかい)である。

町神輿が他の町内を通過するために許可を求める挨拶をワタリツケといい、青年会会長と副会長が浴衣に雪駄ばきで提灯を持ち徒歩で回る。その時の作法と口上は年長者から伝えられ、祭の連帯感ばかりでなく美

意識を持つことにもつながる民俗的仕掛けの一つとという。祭礼の初日に神体を仮殿に移す渡御の儀と神輿・山車の巡行があるが、町内で町内会と青年会がワタリツケを済ませた神輿・山車をムカエそしてオクリをする。祭礼の2日目には仮殿の前で山車からは囃子に合わせた踊り、神輿からは担ぎ手の掛け声が上がり、競演による交換会が行われる。このときに発生した外部から来た神輿担ぎの人々との喧嘩の処理を観察すると、町内の内部の安定を求めて変わらないことへの志向性が見出されるとともに、変化への消極性が見られ、安定性と閉鎖性という二面性を持つ人々の結びつきが再生産されていくことを指摘する。突発的に起こった喧嘩による町内と外部の、仕掛けられる側と仕掛ける側の相互関係により町内の秩序が再生産され、町内という民俗的区画が人々に認識されていくという伝承過程を見ることができるのである。

第2章「宵まちと先祖の記憶－茨城県土浦市沖宿町鹿島神社例大祭の事例－」では、毎年10月に行われる鹿島神社例大祭で、まずムラの祭礼の変化を文書の検討によって明らかにし、次に神社の一連の年間の行事に至るまでを担当する自家の構成員に注目し、祭礼の伝承過程、を考察する。

山車の巡行が今日のように行われるようになったのは、マチの祭礼用具を借り受けることによる変化であり、ムラとマチの交流を示していることを指摘する。宵まちとは、本祭の前夜に行われる神と人の饗宴である。当番に当たった家では庭にテントを設けて飲食物を用意し、山車の引き手らを神とともにもてなす。沖宿町は5組に分かれ、当番は組の順に回るが、組内ではくじ引きで決まる。当番に当たることは大変名誉なことであり、くじが当たるとイエの成員が語る先祖の記憶が思い起こされ、祭礼に結集する核となる。ムラ人にとっては毎年繰り返される五穀豊穡を願う信仰を核とした秋祭りであるが、当屋となるイエの成員から見るとイエの紐帯が先祖の記憶を通して強く意識される行事となるのである。伝承主体としての個人に注目することによって明らかとなるこうした思いこそが祭礼を伝承していく要因となることを指摘する。

第3章「祭礼空間にみる町内の結集－茨城県土浦市真鍋新町町内会の事例－」では、かつての農村部が都市化し新たに誕生した真鍋新町という町内会を取り上げる。毎年9月の鹿島神社例大祭は9町内の氏子によって行われ、その準備から終了までの共同作業を祭祀空間に注目しつつ検討し、人々を結びつける仕掛けを論じる。

真鍋新町は新しい町内のためせいぜい昭和30年代から住みはじめた人々が「旧住民」であり、居住の長短による区別が見られない。真鍋新町の520名前後の人々では祭は運営できないため、外部から100名くらい山車の巡行や競演の手助けが必要とされている。そのほか、町内の囃子の会にも外から個人として加入することができるなど、外からの参入がしやすくなっている。祭に先立ってここでもワタリツケが行われ、儀礼的な口上を述べた後の接待により人間関係が作られていく。祭礼空間には日常的には接する機会のない人々をつなぎ、囃子に合わせた踊りを見るなどする行為を通して祭礼の作法が伝達される場が用意されていることを明らかにした。

結論「まとめと今後の課題」では、次のように本論文をまとめる。

都市における祭礼を取り上げ、旧住民、外部からの参加者、新住民の相互関係から、伝承のありかたを検討した。祭礼の担い手は個人の意思に基づき新たな参入が認められ、町内と結びつく記憶や慣行を通して知識を獲得していく。都市における多様な人々が、祭礼という場を共有することによって新たな人間関係を形成し、情緒的な関係が生まれる過程を伝承過程ととらえる。これにより与えられた規範に従うという静態的な伝承のとらえ方を乗り越え、現代の民俗をとらえる可能性を示した。

伝承過程には生身の人間同士が触れ合う場が必要であり、それこそが人々の結集を可能にする。ムラの検討から導き出された伝承母体論では、民俗を担う個人や集団は地域社会に還元されるとするが、都市においては数世代にわたり定住する人々の間だけでなく、新住民や地域から移動した人々にも伝承を可能とする集団が作られ得る。こうした流動性を人々が集まりともに行動する結集の特性として指摘できる。

今後の課題として、場所性と土地霊の考察、祭礼空間における女性の役割の究明をあげる。

## 審査の結果の要旨

本論文はムラ、城下町の背景を持つ町内、都市化により新設された町内という、条件の異なった3つのフィールドにおいて祭礼を準備段階から調査し、詳細なデータを検討して、都市民俗の把握において伝承過程への注目が肝要であることを指摘している。さらに現代の民俗を対象とすることによって、従来のムラの民俗を対象とするところから出てきた伝承のとらえ方にも一石を投じている。ただ、主体的な営為を強調するあまり神社祭祀のあり方に対する外部からの圧力、あるいは行政的区画の改編などの否応なしの変化については、今少しの配慮が必要であろう。また、記憶に関する先行研究の扱いや調査の方法論についての検討はさらに進めてほしいところである。しかし、辛抱強いフィールドワークによる十分な資料が提示され、都市民俗の新たなとらえ方を提起していることは審査委員の認めるところであり、本論文は高く評価された。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。